

## 提 言

## 子どもを感染症から守る

牛島廣治 (藍野大学医療保健学部/藍野健康科学センター (東京渋谷))

天然痘が根絶され新しい抗生薬が次々と出現した1970年代末は、21世紀は感染症が減少し、国民の健康が増進すると考えられた。その後、エイズ、SARSそして新型インフルエンザと次々に新しいウイルスの流行が見られている。その都度、人々は英知を絞って対策を講じてきた。その対策の1つが予防接種である。ワクチンで予防できる感染症はワクチンで予防するのが原則であるがいろいろな問題も存在する。

わが国では、先進国の中でのワクチン後進国といわれるようにMMR予防接種が行われていない。インフルエンザ菌b型、水痘、ムンプス、B型肝炎ウイルスなどのワクチンは定期接種になっていない。ロタウイルスのワクチンはまだ導入されていない。一方、期間限定である麻疹・風疹ワクチンの第3期、第4期の接種率は約60%である。経済低迷期では、任意接種は有料であるため接種率が低くなる恐れがある。外国籍やオーバーステイの子どもたちは特に心配である。

世界をみると麻疹・風疹の接種も満足に行われていない国がある。また戦争や内紛のある国ではワクチンの接種が中断される。ワクチンで予防可能な疾患に対する対策に国家間の差があるかぎりウイルスの排除ができず予防接種を続けなくてはならない。また生ワクチンが続く限り、生ワクチン株の自然界での野生株化やその免疫から免れた株が出現する。生ワクチンの効果に匹敵する不活化ワクチンが望まれる。

現在の私は感染症の分子疫学とともに迅速診断法の開発を行っており、診断薬は診断会社から市販され、海外にもNPOを介し送っている。その過程でワクチン開発に助けになるもの、あるいはワクチン開発そのものができれば幸いと研究を進めている。



韓国市内 両親と子ども

写真提供 牛島廣治